

エローラ第11窟、第12窟の菩薩群像

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 雅秀, Mori, Masahide メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00001757

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



エローラ第 11 窟、第 12 窟の菩薩群像

森 雅秀

Bodhisattva Sculptures in Ellora Caves, 11 and 12

Masahide MORI

1. はじめに

エローラの第 11 窟、第 12 窟は、いずれも 3 層からなる大規模な仏教石窟としてよく知られている。このふたつの窟はエローラにおいて最後に完成された仏教石窟であり、如来像ばかりではなく、菩薩や女尊、あるいは多臂像などが含まれることから、密教的な要素が認められることも、しばしば指摘される。制作年代には諸説があるが、7 世紀から 8 世紀というのが、大方の見解である。密教經典の成立年代から考えて、この時期に密教的な尊像が現れることには、別段、問題はない。とくに、11 窟、12 窟のいずれにも見られる 8 尊、ないしは 10 尊の菩薩のグループが、胎藏マンダラやその典拠である『大日経』などで重要な役割を果たす八大菩薩に比定され、これらの尊像のグループに中尊が加えられて、八大菩薩マンダラと呼ばれることも多い。そして、これが胎藏マンダラの祖形であるという見方や、インドにおけるマンダラの最初期の作例として紹介されることもある。

このいわゆる八大菩薩や八大菩薩マンダラについては、密教学や仏教美術を専門とする研究者たちによって、すでに多くの考察がなされている。すなわち、伊東（1981）、頼富（1990, 1991, 1992）、松長（1999）、田中（2001）、朴（2001）、定金（2001）、海外でも Gupte（1964）、Malandra（1993）、Donaldson（1995）などの研究があげられる。その結果、これらの菩薩の尊像が観音、金剛手、弥勒、文殊、虚空蔵、地藏、除蓋障、普賢からなる八大菩薩であるということについては、初期の Gupte や伊東は別にして、ほぼ同意が得られている。研究者間の見解の相違は、どの尊像に八大菩薩のいずれを当てはめるかにある。図像的な特徴が安定している観音、金剛手、弥勒、文殊の 4 尊については問題はないが、のこりの 4 尊、とくに地藏と除蓋障については、持物との対応が一定しないため、意見が分かれる。

筆者自身も、これらの作品について、三尊形式の脇侍菩薩からの展開という視点から、簡単な考察を加えたことがある（2001）。そこでは、エローラの後期仏教窟で流行した観

音（蓮華手）と金剛手という組み合わせに、弥勒と文殊というこれに準ずる有力な菩薩が続き、残りの位置を虚空蔵や地藏などの比較的知名度の低い4尊が占めるという見方である。これは主尊である如来像の左右の前方に、4尊あるいは5尊ずつならぶ形式（Pl. 1）だけではなく、2メートル前後の正方形を縦横3等分し、9つの区画を作り、中心を取り囲むように8尊の菩薩を並べた形式（Pl. 2）にも該当する。拙著では、前者を礼拝像タイプと呼び、後者をパネルタイプと呼んだが、いずれの場合も、研究者の間で意見が一致しない4尊については、比定を保留した。その上で、主尊と両脇侍からなる三尊形式から発展してできた礼拝像タイプも、それを格子状の区画に並べたと考えたパネルタイプも、密教のマンドラと呼ぶことには慎重な姿勢を示した。

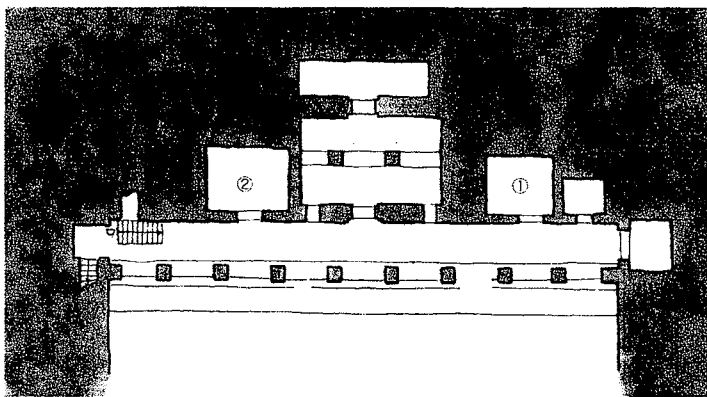
エローラのこのいわゆる「八大菩薩」については、尊名比定の問題を除けば、すでに議論は尽くされた感がある。しかし、いくつかの新しい視点を導入することで、これまでとは異なる解釈の可能性が生まれるのではないかと思われる。そのような視点として、本報告では以下の3点から考察する。

- ①「八大菩薩」の諸作例を、段階的に変化したものとしてとらえる。
- ②「八大菩薩」だけではなく、祠堂内に含まれる他の尊像や壁画も視野に入れる。
- ③祠堂内をひとつの原理で解釈するのではなく、複数のプログラムが混在しているという可能性も認める。

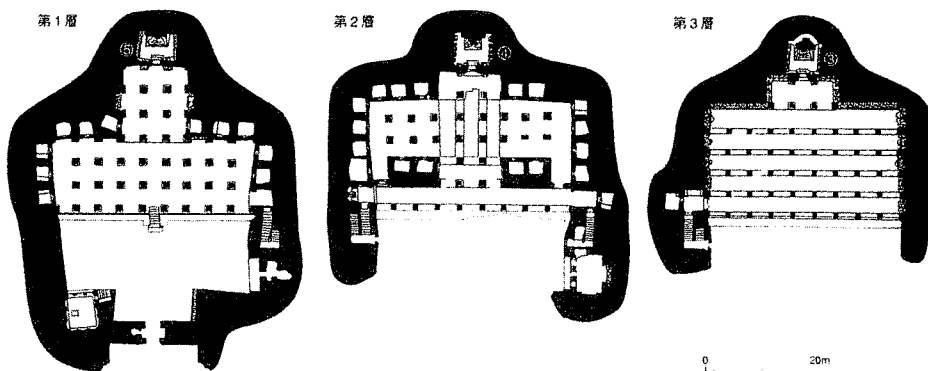
2. 図像上の特徴

問題となる「八大菩薩」は、礼拝像タイプが第11窟の第2層、左右の祠堂にそれぞれ1例ずつ（挿図1の①②）、第12窟の3つの層それぞれの本堂に1例ずつ（挿図2の③④⑤）、合計5例、パネルタイプは第12窟の第2層と第1層、そして両層をつなぐ階段途中から横に開窟された中二階部に合計5例ある。ただし、これらはいずれも「八大菩薩」と呼ばれながらも、構成や形式が一定しない。

礼拝像タイプの場合、第11窟の2例では、如来像の左右に立つ2菩薩は脇侍菩薩として、他の菩薩たちよりも大きく表され、その手前に残りの3尊ずつが直立して並ぶため、2脇侍菩薩と6菩薩という印象を受ける。第12窟では、第3層と第2層の2例では、脇侍菩薩とは別に8尊の菩薩の立像を並べるため、全体は10尊になる。脇侍菩薩が一回り大きく表現されることは、第11窟と同様である。第12窟第1層のみは、8尊がほぼ同じ大きさで表現されているが、立像ではなく、遊戯坐をとる坐像である。また、ここでは脇侍が極端に小さくなり、如来像の隣で胸から上だけを現している。



挿図1 エローラ第11窟第2層プラン



挿図2 エローラ第12窟プラン

礼拝像タイプの場合、祠堂や本堂の入り口から入った左右に、財宝神のジャンバラや、ターラーと思われる女尊の坐像が表されることがある。第11窟向かって右の祠堂、第12窟第3層と第2層の本堂がこれに該当する。また、第12窟第1層では、ジャンバラではなく、四臂のチュンダーの坐像が現れ、さらにその外である入り口左右には、弥勒と文殊の坐像が置かれている。

パネルタイプの場合、5例で大きな違いはなく、中心に定印を結ぶ如来像を置き、同じ区画内でその左右に、払子を持った脇侍立像を小さく表現する。周囲の菩薩たちは輪王坐のようなくつろいだ姿勢をとり、左手に固有の持物を持つ。1例をのぞいて、座に蓮台が表現されるが、下の3区画ではそれが省略されている作品もひとつある。

それぞれの作例に見られる菩薩たちの特徴を以下に示す。図版頁には、各尊の写真図版をそれぞれ掲載したので、あわせて参照されたい。

表1 11窟2層向かって右の祠堂①

	名称	右持物	左持物	その他の特徴
R1	観音	払子	蓮華	化仏,髪髻冠,本尊脇侍(Pl. 3)
R2	弥勒	払子?	欠失	仏塔飾り(Pl. 4)
R3	(不明)	剣(上部のみ残存)	欠失	(Pl. 5)
R4	(不明)	払子?	花?	(Pl. 6)
L1	金剛手	払子	睡蓮の上に金剛杵	本尊脇侍(Pl. 7)
L2	文殊	欠失	睡蓮の上に梵夾	文殊固有の首飾り(Pl. 8)
L3	(不明)	欠失	未敷蓮華の茎	(Pl. 9)
L4	(不明)	欠失	幢幡	(Pl. 10)
R5	ジャンバラ	シトロソ	マングース	鼓腹、遊戯坐(Pl. 11)
L5	ターラー?	欠失	睡蓮	立像(Pl. 12)

表2 11窟2層向かって左の祠堂②

	名称	右持物	左持物	その他の特徴
R1	観音	払子	蓮華	化仏,髪髻冠,本尊脇侍(Pl. 13)
R2	弥勒	欠失	不明(何か握る)	仏塔飾り(Pl. 14)
R3	(不明)	欠失	欠失	(Pl. 15)
R4	(不明)	花?	剣	(Pl. 16)
L1	金剛手	払子	睡蓮の上に金剛杵	本尊脇侍(Pl. 17)
L2	文殊	欠失	睡蓮の上に梵夾	文殊固有の首飾り(Pl. 18)
L3	(不明)	欠失	欠失(蓮華?)	(Pl. 19)
L4	(不明)	欠失	幢幡	(Pl. 20)

表3 12窟3層③

	名称	右持物	左持物	その他の特徴
R1	観音	払子	蓮華	化仏,髪髻冠,本尊脇侍(Pl. 21)
R2	弥勒	花	欠失	仏塔飾り(Pl. 22)
R3	(不明)	花	剣(直接握る)	(Pl. 23)
R4	(不明)	花	欠失	(Pl. 24)
R5	(不明)	花	欠失	(Pl. 25)
L1	金剛手	払子	睡蓮の上に金剛杵	本尊脇侍(Pl. 26)

L2	文殊	花	睡蓮の上に梵夾	(Pl. 27)
L3	(不明)	花	未敷蓮華の茎	(Pl. 28)
L4	(不明)	花	幢幡	(Pl. 29)
L5	(不明)	花	未敷蓮華の茎	(Pl. 30)
L6	ターラー?	なし	睡蓮	半跏坐(Pl. 31)
R6	ジャンバラ	シトロソ	マングース?	遊戯坐,右足の下に壺(Pl. 32)

表4 12窟2層④

	名称	右持物	左持物	その他の特徴
R1	観音	払子	蓮華	化仏、髪髻冠、本尊脇侍(Pl. 33)
R2	弥勒	欠失	腰に当てる	仏塔飾り(Pl. 32)
R3	(不明)	剣(直接握る)	腰に当てる	(Pl. 35)
R4	(不明)	不明	腰に当てる	(Pl. 36)
R5	(不明)	不明	腰に当てる	(Pl. 37)
L1	金剛手	払子	睡蓮の上に金剛杵	本尊脇侍(Pl. 38)
L2	文殊	花?	睡蓮の上に梵夾	(Pl. 39)
L3	(不明)	花?	未敷蓮華の茎	(Pl. 40)
L4	(不明)	花?	幢幡	(Pl. 41)
L5	(不明)	花?	腰に当てる	(Pl. 42)
R6	ターラー?	なし	睡蓮	半跏坐(Pl. 43)
L6	ジャンバラ	シトロソ	マングース?	遊戯坐,右足の下に壺(Pl. 44)

表5 12窟1層⑤

	名称	右持物	左持物	その他の特徴
R1	観音	欠失	蓮華	化仏、髪髻冠(Pl. 45)
R2	弥勒	欠失	龍華	仏塔飾り(Pl. 46)
R3	虚空蔵?	宝珠	睡蓮の上に剣	(Pl. 47)
R4	除蓋障?	宝珠	幢幡	(Pl. 48)
L1	金剛手	欠失	植物?	上半身はほぼ剥落(Pl. 49)
L2	(不明)	欠失	欠失	(Pl. 50)
L3	文殊	与願印	睡蓮の上に梵夾	(Pl. 51)
L4	普賢?	与願印	三つの蕾の花	(Pl. 52)
R5	ターラー	与願印	睡蓮	半跏坐(Pl. 53)

L5	チューンダー	右後手に水瓶、	左後手は不明	四臂で、定印に鉢(Pl. 54)
R6	弥勒		龍華	(Pl. 55)
L6	文殊		睡蓮の上に梵夾	(Pl. 56)

表 6 パネルタイプ (Pls. 57-61)

	名称	右持物	左持物	その他の特徴
R1	観音	台座におく	蓮華	
R2	弥勒	台座におく	龍華	
R3	虚空蔵?	台座におく	蓮華の上に剣	
R4	普賢?	台座におく	植物	
L1	金剛手	台座におく	睡蓮の上に金剛杵	
L2	文殊	台座におく	睡蓮の上に梵夾	
L3	地藏?	台座におく	蓮華の上に宝珠	
L4	除蓋障?	台座におく	幢幡	

3. 「八大菩薩」の再検討

構成と表現の多様性

すでに述べたように、第 11 窟と第 12 窟の「八大菩薩」の作例には、形式上の相違が見られる。礼拝像タイプに限っても、脇侍を含めた 8 尊のみで構成される第 11 窟の 2 例と、10 尊からなる第 12 窟第 3 層と第 2 層、そして、坐像 8 尊で構成される第 12 窟の第 1 層に大きく分かれる。構成だけではなく、様式の点でも、これら 3 つのグループは異なる点が多い。

第 11 窟のふたつの祠堂に見られる脇侍以外の 6 尊ずつの菩薩たちは、同じようなすがたをしながらも、腰のひねりや腕の構えなどで微妙な体の動きが与えられ、それぞれが個性をもって表されている。これに対し、第 12 窟の上の 2 層では、正面向きのいささか硬直気味の身体を持つ。持物を持つ腕も、からだに密着させてやや前面に出す単調な表現である。全体的に、8 尊相互で変化にとぼしく、クローン人間や同じ制服を着た戦士のような印象を与える。顔つきも、やや下ぶくれ気味の豊満な面貌を持つ第 11 窟の菩薩たちに比べ、第 12 窟ではむしろ精悍さが感じられ、場合によっては無表情な顔つきが並ぶ。ただし、これはほぼ同一のすがたをした 8 尊に当てはまることで、主尊の如来の左右に立つ脇侍たちは、堂々とした体軀を持ち、体を乗り出すような動きに満ちたその姿は、第 11 窟の脇侍たちと大きな違いはない。

最後の第 12 窟第 1 層は、これまでの 4 作例とは、立像と坐像という違いがあるため、簡単には比較できないが、全般に身体表現に精彩を欠き、手足や筋肉にも有機的なつながりが乏しい弛緩した体つきである。この窟に限り、脇侍が胸から上のみの小像となっていることは、すでに述べたとおりである。

このような違いは、菩薩たちの図像上の特徴にも、ある程度対応している。

第 11 窟第 2 層の 2 例では、脇侍の観音と金剛手、これに続く弥勒と文殊以外は、いずれもそれぞれに固有の持物を持ち、さらに観音は化仏、弥勒は仏塔飾り、文殊は固有の首飾りをそなえ、容易に比定できる。それ以外で明確に確認できる持物は、剣、未敷蓮華、幢幡の 3 種である。このうち、剣を持つ菩薩の位置がわずかに異なるが、それ以外は位置も共通である。その他の菩薩たちは腕の欠損が多いため、確認できないが、これらの図像上の特徴からは、左右の祠堂でおそらく同じグループの菩薩たちが制作されたと考えてよいであろう。同じ第 2 層の左右という対称的な位置からも、ほぼ同時期の制作であることが予想される。

第 12 層の第 3 層と第 2 層は、やはり、図像上の特徴から、観音、金剛手、弥勒、文殊は容易に比定でき、前の 2 例と同じ位置にあることがわかる。のこりの菩薩たちの固有の持物には、剣、幢幡、未敷蓮華がここでも見られ、その位置もほぼ前と同様であるが、入り口に一番近い菩薩たちの持物は、第 3 層の中尊から見て左の列で未敷蓮華が現れるほかは、腕の欠失などではっきりとは判別できない。持物の特徴からは、入り口に近いこれらの菩薩たちを加えて、第 11 窟の 8 尊を 10 尊に増広した形式であることが予想されるが、あらたにくわえられた 2 尊を比定できるだけの根拠に乏しい。

第 12 窟第 1 層の 8 尊が、坐像というこれまでとは異なる姿勢をとることはすでに述べてきたが、持物の点でも明確な違いがある。中尊から見て右の列の 3 番目の菩薩が、右手に宝珠を握り、左手には直立した剣を載せた睡蓮の茎を持つ。さらに、4 番目の菩薩は、やはり右手に宝珠を握り、左手に幢幡を持つ。一方、左の列では、文殊がその定位置であった 2 番目を別の菩薩に譲っている。この菩薩は両腕とも持物を失っているため、比定できない。3 番目の文殊は睡蓮の上に梵経を載せた通常の姿をとり、その次の 4 番目の菩薩は、3 つの蕾の付いた植物の茎を左手に握る。これまでの作例とは異なる図像の体系を、彼らがそなえていたことがわかる。剣は共通してみられるものの、これまでは剣の柄を握り、直立して構えていたのに対し、ここでは蓮華の上に立てている。

このようなあらたな図像上の特徴によく符合するのが、第 12 窟の中二階と第 1、2 層に見られたパネルタイプの菩薩たちである。中尊の左右の区画には観音と金剛手、それに隣接する区画で、向かって左上には龍華を手にした弥勒、右下には梵経を載せた睡蓮を握る文殊が確認できる。残りの区画には、上段中央が剣を載せた蓮華、上段右が三つの蕾の付いた植物、下段中央が宝珠を載せた蓮華、下段左が幢幡で、それぞれ菩薩の左手の持物と

して現れた。そして、それらを持つ 8 尊の菩薩たちは、立像ではなく、坐像で表される。宝珠を直接持たず、蓮華の上に載せたり、幢幡を持つ菩薩が宝珠を持たないという相違はあるものの、アトリビュートとしての持物は、第 12 窟第 1 層の 8 尊の菩薩たちとほぼ同じ体系にもとづいていると見てよいであろう。

このように、エローラのいわゆる八大菩薩の作例は、第 11 窟の 2 例にあらわれる 8 尊、それを図像上の特徴ではほぼ踏襲しながら、さらに 2 尊を加えた第 12 窟の上の 2 層、そして、それらと一部の特徴は共有しながらも、異なる体系を導入した第 12 窟の第 1 層およびパネルタイプの 5 例とまとめることができる。

石窟の工法上、これらの石窟は上から下を開窟され、さらに第 11 窟が第 12 窟に先行することを考えると、この順序で、菩薩たちの姿や特徴が変化していったことが予想される。おそらく、その時間の幅は、数十年、場合によっては百年以上とみてよいであろう。このような長期間にわたって、一貫した図像上の特徴を持ったひとつの菩薩のグループが、つねに意識されて制作されたと考える方が、おそらく不自然である。これまで、八大菩薩という枠組みで、これらの菩薩たちのグループをすべて解釈しようとしてきたことは、このような時間の幅を過小評価しているのではないだろうか。

八大菩薩を説く文献『八大菩薩曼荼羅經』などに見られる図像の体系は、最後の第 12 窟第 1 層や、パネルタイプの菩薩たちにかかなりよく符合する。それは、アトリビュートを直接手に持たず、蓮華の上にシンボルのように載せる方法が、密教の尊像に広く見られることにも結びつけられる。従来のように、密教の文献に説かれる八大菩薩を意識しているのは、これらの作品に限定しておいた方がよいであろう。ただし、その場合、八大菩薩のマンダラを説く文献がすでに存在し、それにしたがって、これらの作品が作成されたと考えるよりも、第 11 窟から第 12 窟の上層部を経て変化してきた菩薩のグループが、最下層の第 1 層にいたって、ようやく固定化して、それが八大菩薩成立と関わったという程度ではないだろうか。その段階では、マンダラという意識があったかは疑問である。

ところで、はじめにもふれたように、筆者はエローラのこれらの菩薩たちの作例をマンダラと呼ぶことに躊躇している。これに関して、田中氏（2001: 9）はそれが「円で囲まれておらず、放射状に仏たちが配置されていない」という理由からであると理解されているが、そうではない。そのような形式上の問題よりも、むしろ、本質は作品と文献との関係にある。インドの密教の経典や儀軌には、マンダラ的制作方法がしばしば説かれ、実際にそれにもとづいて、当時、多くのマンダラが作られたのはたしかである。しかし、エローラの菩薩たちの群像やパネルは、そのようなマンダラ製作のマニュアルを前提とするような作品とはとうてい思われぬ。むしろ、すでに述べているように、三尊形式に由来する観音と金剛手の 2 脇侍に、段階的に菩薩を加え、ある段階で、8 尊として落ち着いた状況を想定した方が自然である。そこにあらわされた菩薩たちは、マンダラ制作マニュアルが

説くアイコンとしての菩薩ではなく、その場に実際に現れた、いわば血の通った菩薩そのものなのである。

立ち現れた菩薩たち

それでは、同じようなすがたをして並ぶこれらの菩薩たちは、何にもとづき、何を表しているのであろうか。

最後に成立したと考えられる第 12 窟第 1 層の作例とパネルタイプを除き、第 12 窟第 2 層までの 4 例では、菩薩たちは直立した姿で、一列に並んで表された。その位置は、祠堂や本堂の左右の側壁沿いである。ここに整列した菩薩たちは、左右で向かい合わせに立っている。彼らは中央の如来の左右に表された脇侍とは異なり、如来に付き従うわけでもなく、あるいは守門神のように堂内を守る役割を果たしているわけでもない。むしろ、祠堂や本堂に入ってきたわれわれ参拝者を取り囲むかのような印象を与える。その姿勢も、菩薩像や守門神の立像にしばしば見られる、腰や首をわずかにひねる三曲法はほとんどとらず、正面性の強い直立に近いものである。それは、第 12 窟の 2 例ではより顕著になり、隊列を組んだ戦士を思わせる。

密教ではなく大乘仏教の經典から、このような菩薩のグループを解釈できないだろうか。

多くの大乘經典の冒頭には、釈迦が説法を始める前に神変を示す記述が現れる。そこでは三千大千世界、すなわち宇宙全体を震動させたり、宇宙全体を白毫から発した光で照らし、さまざまな仏国土を聴衆に示したりする。そのような神変のひとつに、十方世界にある仏国土を代表する菩薩たちが、釈迦の説法場に参集するというプロセスがある。たとえば『華嚴經』「入法界品」の冒頭では、舍衛城のジェータ林すなわち祇樹給孤独園にある大樓閣を舞台に、釈迦がさまざまな神変を示す。釈迦が獅子奮迅という三昧に入ると、樓閣は無数の聴衆を包摂するために宇宙全体と同じ規模まで拡大され、宝石や黄金、傘蓋、幢幡などのさまざまな装飾によって豪華に莊嚴される。そして、樓閣全体が清浄にされ、美化されるために、種々の莊嚴や供物の雲、雨、花、樹木、瓔珞、華鬘、樂器、天女が手にする幢幡などで覆われる。このようにして、完全に莊嚴された世界が出現すると、まず、東の方角の無数の仏国土をすぎた果てにある仏国土から、毘盧遮那願光明という菩薩が、無数の菩薩たちとともに大樓閣にやってくる。そして、その東に準備された蓮華台の獅子座に結跏趺坐をしてすわる。以下、南西北、そして東北などの四維と上下の合計十方から、それぞれの仏国土を代表する菩薩が、ジェータ林の大樓閣に到来し、釈迦の周囲の座を占める（梶山 1994a: 28-43）。

このような記述は、『華嚴經』「入法界品」と同じ頃に編纂されたと考えられる『大品般若經』にも見られる。そこでは、釈迦の口から放射された光によって三千大千世界が照らし出され、無数の世界の者たちが相互に照見しあう。そして、東の果てにある宝積如来の

仏国土から、普明という菩薩が、無数の出家、在家の菩薩や童男童女をひきつれて、釈迦如来のところへ来て供養し、その集会に参加する。以下、十方の残りの仏国土からも、同じように、それぞれを代表する菩薩たちが釈迦の集会に参集する（梶山 1994b: 457）。

エローラの菩薩たちを、これらの十方世界から参集した菩薩たちと解釈できないだろうか。

立像で正面性の強い菩薩の群像は、すでに述べたように、脇侍とも礼拝像ともことなる独特の姿であるが、釈迦の集会に参加するために到来した姿と見れば、その特異性も納得できる。宇宙の果ての仏国土から、まさに到着した瞬間の菩薩たちを、正面向きの立像で表したのである。第 12 窟の第 3 層と第 2 層では、脇侍を含めると菩薩の数が 10 になることも、十方世界からの菩薩の数に合致している。第 11 窟では 8 尊であったことは、恣意的かもしれないが、8 という数が全体を表すということで説明できないだろうか。

このように、菩薩たちを大乘經典の神変と結びつけて解釈するのは、むしろ、菩薩以外の要素に大きく依存している。祠堂や本堂の中央にすわる如来像は、その背障の装飾モチーフなどから、単なる歴史上の釈迦ではなく、久遠常住の仏を意図していることが、すでに指摘されている（宮治 1993: 243）。象、獅子、ヴィヤーラカ（グリフォンに似た有翼の動物）、マカラ、ナーガなどを上下に重ねた背障の装飾モチーフは、大地、虚空、天界という宇宙全体を表し、これを玉座として坐す釈迦は、宇宙全体に君臨する宇宙主としての釈迦をイメージしたものなのである。このような「宇宙仏」としての仏陀の姿は、カーンヘリーやアジャンターなど、エローラ近辺の仏教石窟においても、ひろく見られるものである。

祠堂や本堂の上部にならぶ仏坐像（Pl. 62）も、大乘經典の神変と結びつけることができる。菩薩群像を置く祠堂や本堂内部には、側壁および入り口左右の壁の上部に棚のようなスペースを作り、ここに仏坐像を複数並べている。第 11 窟第 2 層向かって左の祠堂の場合、側壁には 3 体、入り口の左右の壁にはそれぞれ 2 体ずつある。第 12 窟では側壁の仏坐像は 5 体になる（Pl. 63）。定印を結ぶものが多いが、説法印も一部に見られる。これらの仏坐像が何を表しているかについては定説がないが、神変の記述にみられる仏国土の仏たちに理解することができる。すなわち、十方世界から参集した菩薩たちは、その前に、それぞれの仏国土で、その国土を支配する仏から許可を得た上で、大楼阁へと向かう。堂内で直立する菩薩たちが背後に残してきた仏国土とその仏を、菩薩の上部に表現したのである。

第 11 窟第 2 層の場合、これらの坐仏の頭上に樹木が表現されているのも注目される。このようなモチーフは第 12 窟第 3 層で、本堂前の広間の向かって左にならぶ定印の仏坐像にも見られる。この仏坐像は 7 体を数え、それぞれが異なる種類の樹木を頭上に置くことから、各自が特有の菩提樹を有する過去七仏と解釈されている（平岡 2000）。これと対

称となる向かって右にも、同様に 7 体の仏坐像がならぶ。ただし、こちらには樹木ではなく傘蓋が掲げられ、印も説法印をとる。この 7 体については尊格比定に定説はないが、向かって右の 7 体とあわせた 14 体が、いずれも釈迦とは異なる仏を表していることは確かであろう。祠堂内の仏坐像もこのような多仏を前提とする仏教世界観が背景にあったと考えられる。

これらに加え、堂内の壁画も神変の状況を意識していると思われる。第 12 窟第 3 層の本堂には、エローラの仏教窟では珍しく、壁画が部分的に残されている。そこに表されているのは、天井の中心から同心円状に広がる円環状のモチーフと、それにそって生い茂る樹木の枝 (Pl. 64)、天井の余白の部分を埋めるように作られた格子とその中に描かれた蓮華と飛天や天女たちである。壁にも菩薩像の光背のななめ上に、男女の飛天の姿が見られる (Pl. 65)。おそらく、当初は本堂の内部が、このようなモチーフで覆い尽くされていたのであろう。そこは単なる仏像を安置した礼拝空間ではなく、さまざまな装飾モチーフで荘厳された仏の世界なのである。これは、神変の時にジェータ林の大樓閣が、光に満ちあふれ、宝石、花、樹木などで荘厳されたことを彷彿とさせる。

陀羅尼經典とのかかわり

このような神変のイメージは、大乘經典だけではなく、一部の密教經典にも受け継がれる。その中で注目されるのが、『出生無辺門陀羅尼經』という經典である。この經典名は唐代の不空訳 (大正蔵 1009 番) のものであるが、類似の内容を持った經典が 9 種存在する (大正蔵 1009~1018 番)。このうち、最も古いものが呉の支謙訳の『仏說無量門微密持經』 (大正蔵 1011 番) で、訳出年代は 3 世紀の前半である。以下、東晋、梁、隋などでも訳出され、最後の不空訳が 8 世紀半ばとなる。少なくとも 5 百年にわたり、インドで流布していたことが確実で、その成立年代からは、密教經典と呼ぶよりも、大乘仏教における陀羅尼經典としてとらえるべきであろう。なお、この場合の陀羅尼とは、口に誦する呪句としての陀羅尼という密教で一般的なものではなく、大乘の菩薩が体得受持すべき心の状態を指す (堀内 1996: 125)。

この經典では、ヴァイシャーリーが舞台となる。釈迦が 3 ヶ月後に涅槃に入ることが明らかにされ、遺經としての教えが説かれることになる。そのため、經の対告衆すなわち聴衆として目蓮と舍利弗によって比丘が集められ、さらに、釈迦が神変を示して、三千大千世界の聴衆が、ヴァイシャーリーの大樓閣へと参集する。そして、それらとは別に、釈迦によって菩薩が十方世界へと派遣され、それぞれの方角で無数の菩薩が集められて、ふたたび大樓閣へと至るというプロセスがある。大樓閣に参集した菩薩たちを含む聴衆を前にして、菩薩のなすべきことや大乘仏教の教えの真髓を説くのが、經典の中心部分である。

十方の仏国土から菩薩が参集するというプロセスは、『華嚴經』などでも見られたが、

ここでは、仏国土に派遣され、ふたたび大樓閣へと戻る 10 尊の菩薩たちの名称に、観音、弥勒、文殊などの著名な大乘の菩薩たちが含まれる。漢訳の種類によってその訳語や順序に異同があるが、オリジナル・テキストではほぼ一定であったと推測される。なお、9 種の漢訳の中で不空訳のみは 10 尊ではなく 23 尊の菩薩の名称をあげる。これは既存の 10 尊に 13 尊を加えたものだが、これら 23 尊の中には、金剛界マンダラの周囲に配される賢劫十六尊の名称がすべて含まれる。本来の 10 尊のうちの 5 尊も賢劫十六尊のメンバーであり、この経典が賢劫十六尊の成立に何らかの形で関わったことが予想される。

十方世界から参集する菩薩たちの名称は、『華嚴経』や『大品般若経』にも現れたが、毘盧遮那願光明や普明のように、その名称は特殊なものである。図像の伝統を有しないこのような菩薩を、尊像として造形化することは、おそらく不可能であっただろう。しかし『出生無辺門陀羅尼経』では観音や文殊などのよく知られた大乘の菩薩の名称が用いられ、神変において大樓閣に参集する菩薩を、このようなイメージでとらえていたことがわかる。

エローラの菩薩群像において、観音、弥勒、文殊が必ず含まれていたことは、すでに前節で見たとおりである。神変で活躍する菩薩たちを造形化するときに、このような既存のイメージを用いることが、ある程度可能だったのである。そして、そのようなイメージを有しない菩薩たちには、剣や未敷蓮華、幢幡のような固有の持物を与えることで、相互の区別を付けたのであろう。

ただし、観音と脇侍を構成する金剛手は、『出生無辺門陀羅尼経』の 10 菩薩、あるいは 23 菩薩の中には含まれない。脇侍の観音と金剛手のみは、同じ姿で整列する他の菩薩たちとは異なり、三尊形式の脇侍のすがたを堅持したことから、十方の菩薩としての役割よりも、伝統的な脇侍としてとらえられたと見るべきであろう。

『出生無辺門陀羅尼経』のような経典をエローラの菩薩像の解釈に用いるのは唐突に見えるかもしれない。しかし、エローラにおいて陀羅尼信仰が流行していたことは、第 6 窟や第 8 窟に陀羅尼の女尊の一人であるマハーマーユリー（孔雀明妃）の大規模な作品があることや、菩薩の群像がある第 12 窟に、おそらく陀羅尼の女尊たちを集めたと考えられる 12 の坐像があることから、容易に推測される。第 12 窟の女尊たちをすべて比定することは困難であるが、孔雀を伴うマハーマーユリーをはじめ、プリクティやジャーングリーなどが含まれるようである。また、漢訳年代の幅の広さや、チベット大蔵経にインド撰述の注釈書が残されていることから、この経典がインドでは長期間にわたり、広範囲に流布していたこともたしかである。エローラがその一カ所であったとしても不思議ではない。なお、同経の末尾には、この経典を受持する者たちを八夜叉と八菩薩がつねに守護するという功德が説かれている。ここで登場する八菩薩は、経の冒頭で十方世界に派遣される菩薩たちとはまったく異なり、八王子とも呼ばれる（堀内 1996: 139-140）。かれらは密教の「八大菩薩」とも一致しないが、8 尊の菩薩をグループとしてとらえる発想が認め

られることは注目される。

その他の要素

菩薩が並ぶ祠堂や本堂には、入り口入って左右の壁にジャンバラやターラーなどの坐像が置かれる。組み合わせはジャンバラとターラーが3例で、ターラーとチュンダーが1例である。これらの尊像を大乘經典の神変から解釈することはできない。むしろ、僧院の入り口に置かれる財宝神としての役割をになっていると見るべきであろう。これについては頼富氏の論考（1991）にくわしいが、一對の男女の財宝神の組み合わせは、ガンダーラのパーンチカとハーリーティー像ですで見られ、マハーラーシュトラでもアジャンタ第2窟やオランガバード第7窟において、ヤクシャ・ヤクシニーの姿で表される。類似の組み合わせはオリッサでも見られるが、女尊は稲穂を持ったヴァスダラーに交代することもある。

エローラで見られるジャンバラとターラーの組み合わせは、他の地域ではまったく見られない独自のものである。經典や儀軌類、あるいは成就法類などでも、それを説くものがないことは、すでに頼富氏が指摘している。エローラ特有の組み合わせと見るしかないが、男女の財宝神を寺院の入り口に安置するという発想は、他地域と共通である。また、一般に遊戲坐をとることの多いターラーが、ここではつねに半跏坐をとることにも注意を要する。このような坐法は、地域的には相当の距離の開きがあるが、インドネシアのヴァスダラー像によく見られる。エローラの女尊はウトパラを左手に持ち、ヴァスダラー固有の持物である穀物の穂を手にするのではないが、ターラーではなく、ジャンバラの配偶尊として知られたヴァスダラーと比定することも、可能性としてはあり得る。

本尊の如来像は、宇宙手としての仏陀という解釈を示したが、これには別の要素を指摘することができる。台座の左右にしばしばアパラージターと地天が表されていることから、降魔成道の釈迦が基本になっているからである。頭上に広がる樹木も、菩提樹を表したもののとして、降魔成道の場面で広く見られる。ただし、これらも『出生無辺門陀羅尼經』と結びつけることも不可能ではない。ヴァイシャーリーでの釈迦による寿命の放棄は、仏伝の中では「第2の降魔」とも呼ばれ、それまで釈迦につきまといてきたマーラに対して、釈迦が最終的な勝利を収めた出来事であると、伝統的に解釈されてきた。おそらくそのためであろう、『出生無辺門陀羅尼經』群の最古の漢訳である支謙による『仏說無量門微密持經』は、經典の別名として「成道降魔・得一切智」という名称を挙げている。

本尊と二脇侍に関しては、これまでも繰り返してきたように、エローラで一般的な観音と金剛手を左右に配した三尊形式が基本である。この二脇侍のみは他の菩薩たちとは明確な区別が与えられ、つねに仏子を持った堂々とした姿で表されている。しかし、松長氏（1999）が指摘するように、その他の菩薩たちと、持物の重複が認められないことから、

十方の仏国土から参集した菩薩たちの一部も構成していると解釈すべきであろう。彼らは三尊形式と菩薩のグループという二つのカテゴリーに共有された存在なのである。

4. おわりに

従来、八大菩薩マンドラとして紹介されることが一般的であったエローラ第 11、12 窟の菩薩群像に対して、大乘經典の神変という視点から捉えてみた。そうすることによって、これまであまり問題にされなかった菩薩たちの特徴的な姿勢や、8 尊ではなく 10 尊となる菩薩の数などが、比較的、自然に説明できる。さらに、菩薩以外の要素である主尊の如来やその装飾モチーフ、上部に置かれた複数の仏坐像、壁面や天井の装飾などのすべてを、無理なく関係づけることができた。この点において、別の文脈からではあるが、田中氏（2001: 11）がマンドラの起源として「報身の説法に連なった菩薩の集会 *pariṣan-maṇḍala*」をあげているのは正鵠を射ている。しかし、そのような集会の場面から密教のマンドラにいたるまでには、さまざまな段階を経る必要があるであろう。ましてや、すでに儀軌や図像の存在しているマンドラをもとに、エローラのような菩薩群像を作るという考え方は、そのような段階をわざわざ後戻りさせて、神変の場面を再構成したことになり、妥当とは思われない。

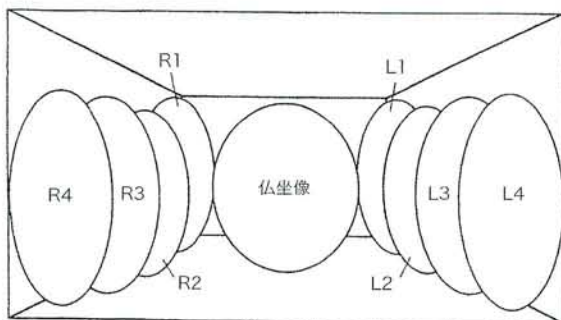
第 11 窟、12 窟の菩薩群像の制作に、ある程度の時間の幅があったことは、すでに述べた。本稿で提示した大乘經典の神変という視点から解釈できるのは、第 12 窟の第 2 層までであろう。これらと、第 12 窟第 1 層や、それに類するパネルタイプの作品とのあいだには、明らかな断絶がある。後者を密教の八大菩薩として解釈することは、持物の体系から判断しておそらく可能である。しかしその場合も、八大菩薩マンドラのような既存のマンドラにもとづくのではなく、段階的に整備されてきた菩薩のグループが、のちの胎蔵マンドラのような八大菩薩を含むマンドラに影響を与えたと見る方が適切であろう。

付記

本稿は科学研究費補助金「古代インドにおける宗教的造形の諸相 寺院建築と美術の成立と展開」（基盤研究(A)海外学術 研究代表者 宮治昭名古屋大学大学院教授 課題番号 14251001）、同「インドにおける宗教的空間の象徴性に関する学際的研究」（基盤研究(B)一般 研究代表者 森雅秀 課題番号 18320015）、同「仏教における空間表象の比較研究」（萌芽研究 研究代表者 森雅秀 課題番号 17652006）および高梨学術財団による平成 18 年度研究助成「西インド・エローラ石窟における密教図像の成立に関する研究」（研究代表者 森雅秀）の研究成果の一部である。本文中の挿図 1 は佐藤（1977）より、挿図 2 は平岡（2000）からそれぞれ借用させていただき、一部加工を行った。

文献

- Donaldson, Thomas E. 1995 Probable Textual Sources for the Buddhist Sculptural Maṇḍalas of Orissa. *East and West* 45(1-4): 173-204.
- Gupte, Remash Shankar 1964 *The Iconography of the Buddhist Sculptures of Ellora*. Aurangawad: Marath-wada University.
- 平岡三保子 2000 「西インドの石窟寺院」『世界美術大全集 東洋編 第一三巻 インド（一）』肥塚隆・宮治昭編 小学館、pp. 257-272.
- 堀内寛仁 1996 『金剛頂経形成の研究 堀内寛仁論集 下』法蔵館。
- 伊東照司 1981 「エローラ石窟寺院の仏教図像」『仏教芸術』134: 84-119.
- 梶山雄一監修 1994a 『さとりの遍歴 華嚴経入法界品（上）』中央公論社。
- 梶山雄一監修 1994b 『さとりの遍歴 華嚴経入法界品（下）』中央公論社。
- Malandra, Geri Hockfield 1993 *Unfolding a Mandala: The Buddhist Cave Temples at Ellora*. Albany: State University of New York Press.
- 松長恵史 1999 『インドネシアの密教』法蔵館。
- 宮治 昭 1993 「宇宙主としての釈迦仏 インドから中央アジア・中国へ」『曼荼羅と輪廻』佼成出版社、pp. 235-269.
- 森 雅秀 2001 『インド密教の仏たち』春秋社。
- 朴 亨國 2001 「八大菩薩の成立と図像の変化について：インドのオリッサ州および中国甘肅省の作例を中心に」宮治昭編『インドから中国への仏教美術の伝播と展開に関する研究』（平成10～12年度科学研究費補助金（国際学術研究）研究成果報告書）pp. 327-356.
- 定金計次 2001 「インドにおける脇侍としての観音菩薩像及び対をなす菩薩像の図像的展開：中世初期以前について」宮治昭編『インドから中国への仏教美術の伝播と展開に関する研究』（平成10～12年度科学研究費補助金（国際学術研究）研究成果報告書）pp. 285-326.
- 佐藤宗太郎 1977 『エローラ石窟寺院』木耳社。
- 田中公明 2001 「胎藏大日八大菩薩と八大菩薩曼荼羅の成立と展開」『密教図像』20: 1-15.
- 頼富本宏 1990 『密教仏の研究』法蔵館。
- 頼富本宏 1991 「インド現存の財宝尊系男女尊像」『伊原照蓮博士古稀記念論文集』九州大学印度哲学研究室、pp. 267-299.
- 頼富本宏 1992 「マンダラと八大菩薩」『日本仏教学会年報』57: 251-267.



1. 礼拝像タイプ概念図

R2	R3	R4
R1	仏坐像	L1
L4	L3	L2

2. パネルタイプ概念図



3. 観音（第11窟向かって右の祠堂）



4. 弥勒（同前）



5. 剣を持った菩薩（同前）



6. 未比定菩薩（同前）



7. 金剛手（同前）



8. 文殊（同前）



9. 未敷蓮華を持った菩薩（同前）



10. 幢幡を持った菩薩（同前）



11. ジャンバラ（同前）



12. ターラー？（同前）



13. 観音（第11窟向かって左の祠堂）



14. 弥勒（同前）



15. 金剛手（同前）



16. 文殊（同前）



17. 金剛手 (同前)



18. 文殊 (同前)



19. 未比定菩薩 (同前)



20. 幢幡を持った菩薩 (同前)



21. 観音（第12窟第3層本堂）



22. 弥勒（同前）



23. 剣を持った菩薩（同前）



24. 未比定菩薩（同前）



25. 末比定菩薩（同前）



26. 金剛手（同前）



27. 文殊（同前）



28. 未敷蓮華を持った菩薩（同前）



29. 幢幡を持った菩薩（同前）



30. 未敷蓮華を持った菩薩（同前）



31. ターラー？（同前）



32. ジャンバラ（同前）



33. 観音（第12窟第2層本堂）



34. 弥勒（同前）



35. 剣を持った菩薩（同前）



36. 未比定菩薩（同前）



37. 未比定菩薩（同前）



38. 金剛手（同前）



39. 文殊（同前）



40. 未敷蓮華を持った菩薩（同前）



41. 幢幡を持った菩薩（同前）



42. 未比定菩薩（同前）



43. ターラー？（同前）



44. ジャンバラ（同前）



45. 觀音 (第12窟第1層本堂)



46. 彌勒 (同前)



47. 虛空藏? (同前)



48. 除蓋障 (同前)



49. 金剛手（同前）



50. 未比定菩薩（同前）



51. 文殊（同前）



52. 普賢？（同前）



53. ターラー (同前)



54. チュンダー? (同前)



55. 弥勒 (同前)



56. 文殊 (同前)



57-1. 弥勒



57-2. 虚空藏？



57-3. 普賢？



57-4. 観音



57-5. 脇侍を伴う定印仏坐像



57-6. 金剛手



57-7. 除蓋障？



57-8. 地藏？



57-9. 文殊



58-1. 弥勒



58-2. 虚空蔵？



58-3. 普賢？



58-4. 観音



58-5. 脇侍を伴う定印仏坐像



58-6. 金剛手



58-7. 除蓋障？



58-8. 地藏？



58-9. 文殊



59-1. 弥勒



59-2. 虚空藏？



59-3. 普賢？



59-4. 観音



59-5. 脇侍を伴う定印仏坐像



59-6. 金剛手



59-7. 除蓋障？



59-8. 地藏？



59-9. 文殊



60-1. 弥勒



60-2. 虚空藏？



60-3. 普賢？



60-4. 観音



60-5. 脇侍を伴う定印仏坐像



60-6. 金剛手



60-7. 除蓋障？



60-8. 地藏？



60-9. 文殊



61-1. 弥勒



61-2. 虚空藏？



61-3. 普賢？



61-4. 観音



61-5. 脇侍を伴う定印仏坐像



61-6. 金剛手



61-7. 除蓋障？



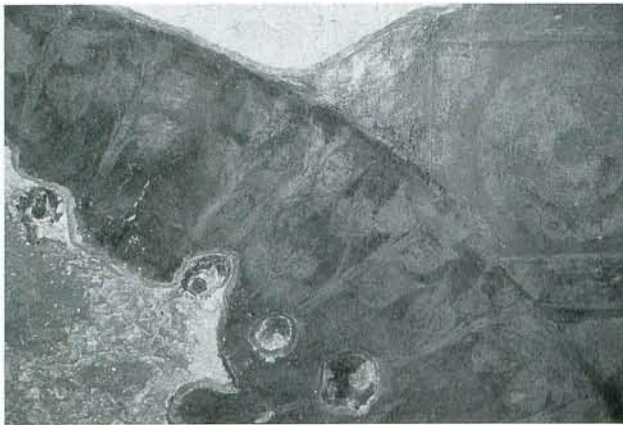
61-8. 地藏？



61-9. 文殊



62. 祠堂内上部の仏坐像



63. 天井装飾(第12窟第3層)



64. 飛天(第12窟第3層)